



代表4選手を決定

震災余波の中、初めてのヨーロッパへ

地学オリンピック日本委員会は、6月11・12日の両日、東京大学理学部で開催された地学オリンピック国内2次選抜で、優秀な成績を収めた4名をヨーロッパ初の開催となるイタリアのモデナ市での第5回国際地学オリンピックに代表選手として派遣することを決定した。



試験最終日、宿泊していた旅館の前に集合した2次選抜参加者達

代表に決まったのは、浅見慶志朗（埼玉県立川越高3年）、松岡亮（北海道旭川西高3年）、松澤健裕（栄光学園高2年）、渡辺翠（桜蔭高1年）の4名。昨年12月19日の第1次試験に始まった筆記試験、実技試験、面接を乗り越え、応募者869名の頂点に立った。4名は今後、通信研修と8月に開催される合宿研修を経て、9月の国際大会に臨む。

また、惜しくも代表には選ばれなかったものの、優秀な成績を収めた中里徳彦（横浜市立サイエンスフロンティア高2年）、橋本昭平（武蔵高3年）、平井宏和（灘高3年）、丸山純平（聖光学院高2年）の4名には優秀賞が授与された。

2次選抜は昨年と同様、茨城県つくば市で実施する予定であったが、東日本大震災による混乱をさけるために、東大での延期実施となった。

東京での開催ながら、昨年と同様、茨城県知事賞（総合1位）とつくば市長賞（女性の総合1位）が設けられ両賞とも渡辺翠さんが受賞、また地質調査総合センター長賞（地質実技試験最優秀者）に橋本昭平君が選ばれた。渡辺さんは、派遣の年齢制限に届かなかった昨年もつくば市長賞を受賞。2年連続の受賞とともに、念願の代表切符を手にした。

2012年国際大会を返上

震災と原発事故をうけ

2012年の第6回国際地学オリンピックは日本のつくば市で開催されることが決まっていたが、今年3月11日に発生した、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けて、大会を返上することになった。代替開催地としては、南米アルゼンチンが名乗りを上げ、大会の中止という最悪の事態は避けられた。日本での開催に向けて、地学オリンピック日本委員会は最後までぎりぎりの努力を行った。まず問題となったのは、開催予定地であるつくば市が震災の被害を受けたこと。とくに会場である筑波大学でも、図書館や体育館をはじめ、多くの建物で内壁が崩落するなどの被害が出た。代替地として西日本の開催が検討されたが、交通の利便性などで断念。財政に関しては、被災地の復興財源が優先され、民間企業などからの協賛金も限界があることなどから、大会開催には今一步届かなかった。

地学オリンピック日本委員会の瀧上豊事務局長は、「被災地を見て地震や津波の威力を各国の選手に実感してもらおうというのも、地学オリンピックとしては重要で、参加者に大きな経験になるものと日本開催には最後まで努力したが、原発事故の収束が見えないのも大きかった」と、参加各国から原発事故への不安の声があったことも示唆した。

【今号の紙面】選手達の感想（2面）。震災に翻弄された地学オリンピック（3面）。東日本大震災の発生をうけた理事長のコメント（4面）。

いざ、イタリアへ

毎年の挑戦で代表キップを手にした選手たち

去年の雪辱を果たした

私は、元々地球温暖化に興味があり、地球温暖化の記事を科学雑誌のニュートンで読んでいた際に、地学オリンピックのことを知り、地学の勉強を始めたのがきっかけで地学にのめり込んでいきました。実は、私は去年も地学オリンピックに参加したのですが、予選を通過したものの、本選では案の定レベルの差を見せつけられ、がっかりして家に帰り、その日から来年の地学オリンピックに向けて勉強し始め、今度こそは絶対に代表になってやると思ったことを覚えています。3月の試験が延期になった際はがっかりしましたが、6月の試験に向けて集中力を高めることが出来ました。

今、代表になって改めて振り返って見ると、悔しさをバネにここまで来たなという感じがします。しかし、これからは日本の代表としての責任を全うし、イタリア大会で金メダルを取れるように努力に努力を重ねていきたいと思っています。

また、国際大会では各国の代表の人々とも交流を深め、友達になりたいと思っています。そして、イタリアの文化も満喫し、忘れられない思い出にしたいです。皆さん応援宜しくお願いします。

松澤健裕選手

(栄光学園高等学校 2年)

自分の学びを還元したい

私は地学部には所属していますが、そのことを友達に話しても多くの場合『地学って何?』とたずねられます。記憶に新しいように日本は火山・地震大国ですし、毎年台風等の気象災害がおきます。また、最近日本近海に海底資源が発見され注目を集めています。このように地学を学ぶべき日本人が義務教育のさわり程度の地学しか学ばずにいるのは危惧すべきことだと思います。県立川越高校では

地学オリンピックに日本が参加した年から毎年挑戦し、毎年入賞しています。

しかし、私が入学してから2年間、地学が専門の教諭がおらず、地学の授業も開講されていませんでした。なので、私は地学オリンピックに挑戦すべく地学を独学で学びました。と書ければ格好良いのですが実技的な部分などは、先輩方に教わったり、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の活動を通じて学びました。毎年入賞しているという伝統のプレッシャーもありましたが、それゆえの強力なバックアップに助けられました。地学オリンピックに日本代表として出場するにあたって、鉱物の同定など実技的にまだまだ未熟な部分も多いですが、ご協力いただいた方々に恩返しができるよう、また自分が学んだことを世界に還元できるように頑張ります。

浅見慶志朗選手

(埼玉県立川越高3年)

日本は元気と伝えたい

今回は地学オリンピックへの二回目の挑戦でした。去年はまだ中学生でしたので、国際大会への出場資格はありませんでした。ですので、今年こそ、という思いで臨みました。

一次選抜の問題は例年以上に難しく、知識だけでなく素早く正確に計算できる技術も必要なのだと感じました。

3月の二次選抜は、前回の楽しかった思い出がありましたので、とても楽しみにしていました。ところが、3月11日に東日本大震災が起きました。東京にいた私たちの生活にも大きな影響がありました。もちろん二次選抜は延期となりました。なんだか穴があいたように感じました。

実際に鉱物を採集したり、望遠鏡を組み立てたりする経験の浅い私にとって、やはり実技試験は難しかったです。試験を終えた後、面接を受ける8人に選

ばれていないかもしれないと、とても不安でした。結局、代表には選ばれましたが、まだまだ勉強が足りないところがたくさんあるとわかりましたので、これから頑張りたいです。イタリアでは、日本は大丈夫、元気だということを伝えてきたいです。そして、たくさんのことを学んできます。もちろん試験では全力を尽くし、今までの努力の成果を出していきたいです。

渡辺翠選手

(桜蔭高等学校 1年)

地学の奥深さに触れられた

「グランプリ地球にわくわく」は地学に興味を持った人たちが全国から集まるので、その分野に興味がある僕にとっては、とても貴重な交流の場でもありました。今回も、全国の地学好きの仲間と語り合い、楽しいひと時を過ごすことができました。3年生の僕にとってこれが最後の二次選抜なのだと思うと、終わってしまうのが寂しいような気持ちになりました。

地学に触れるきっかけとなったのは、幼稚園の遠足で行ったプラネタリウム見学でした。そこから科学全般に興味を広がり、今に至っています。

地学オリンピックの存在を知ったのは、中学生の頃でした。高校生になって、地学オリンピックを受けるにあたって、改めて、地の底から天の果てまで大きく広がる地学の奥深さに触れることができました。

このような広い学問である地学を学んで、日本代表として選ばれたのはとても光栄なことだと思います。このような機会を与えていただいたことに感謝して、悔いの残らないよう、国際大会に臨みたいと思います。まだまだ至らないところもありますが、地学のさらなる深い知識を得られるよう頑張ります。

松岡亮選手

(北海道旭川西高等学校 3年)

震災に翻弄された地学オリンピック

3月11日の東日本大震災により、地学オリンピックは国内2次選抜試験の延期と開催場所の変更や、2012年大会の返上（1面参照）など、大きな影響を受けた。震災のダメージと、今後の地学オリンピックの取り組みについてまとめてみた。

3.11直後の動き

昨年から二次選抜は、「地球にわくわく」と称して、第一線の科学者による「とっぷ・レクチャー」などの、地学の普及にも力を入れたイベント色のある企画もあわせて行う試みを始めた。今年も3月24日から26日にかけて、昨年と同様、つくば市において実施する予定で準備が進められたが、地震の発生を受けて延期された。

東日本大震災では、岩手、宮城、福島被害が大きく連日報道されていたが、人的損害は軽かったものの、つくば市の被害もかなりのもので、計画停電の実施や断水、交通手段の見通しが立たないことなどから14日に中止やむ無しの決断に至った。

OBが支える国内予選

国際地学オリンピックへの参戦も今回で4回目となるが、過去3回の大会に参戦して現在は大学生となっているOB達は国内予選を支える貴重な戦力となっている。

一昨年の第3回台湾大会の日本代表で銀メダリストの富永紘平さんは現在筑波大学地球学類に通う大学生。「地元」になったつくばで予定されていた最終予選や関連イベントが震災でキャンセルとなったのはとても残念と語るが、東京でひさびさに地学オリンピックOB達と一緒に大会を手伝ったのは、楽しい経験となったようだ。

富永さんによれば、過去3回の出場ともなるとOBの間で各大会の開催国の特徴を比較できるという。選手達の様子は、大会役員として参加する「大人」た

当初は3月中の東京での実施や、選抜を中止して予選のトップ4名を派遣することなども考えられたが、最終的には東京大学での2日間の開催に落ち着いた。

東京大学での開催

東京大学で開催された二次選抜には27名の高校生とチャレンジ受験の3名の中学3年生が参加した。二次選抜には過去の地学オリンピック日本代表がOBとして運営の手伝いに活躍したほか、参加者にOBとしての体験を話して交流を深めた。

2次選抜では筆記試験の他、実技試験として、天体望遠鏡の操作と、地質標本の鑑定とそれに基づく地質解釈が課された。

中にはみえにくいこともあり、各国の特徴の分析は今後日本が戦いを進めていく上で重要かもしれない。

また今回の大会はOBが、大会の裏方として生徒の誘導や試験監督などに活躍したほか、生徒と一緒に旅館に泊ったり、大学を見学したりして交流を深めながら地学オリンピックの魅力伝えていった。

震災の影響で縮小されたとはいえ、OBの大学生と、全国から集まった30名の選手が2日間にわたって一緒に活動するのは、日本の初参戦となったフィリピン大会などから比べると十分大きい規模とはいえ、関係者からは「隔世の感」という声も聞こえる。

震災の影響で二次選抜は簡素なものとなったが、大会の運営や出題はこれまで3年間の実績を踏まえた充実したものとなった。

日本大会の今後

地学オリンピック日本委員会は、6月12日、二次選抜のあと開催された総会で、震災の打撃から立ち向かう上で、地球に関する知識を身につける必要性がこれまで以上に増しているという認識を確認した。今後も、国際地学オリンピックへの代表選手派遣の事業を続けていく予定である。

一方、2012年大会に向けて各団体から受け取った協賛金の取り扱いについては、意向調査を行うとともに、基本的には返却する方向で進むこととなった。



実技試験で使う望遠鏡を準備する日本代表OB

地学オリンピックの目標の一つは地学の普及であるが、OBの増加はそうした目標が実現していくさまを見るようである。地学オリンピック関係者は、続けていく大切さをひしひしと感じている。



OB達と東京大学内の散策を楽しむ参加者達（三四郎池）

東日本大震災を受けて

地学オリンピック日本委員会の今後に向けた取り組み

濱野 洋三 (NPO 法人地学オリンピック委員会理事長・海洋研究開発機構)

平成 23 年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）によって尊い命をなくされた多くの方々に深い哀悼の思いを捧げるとともに、様々な形で被災された皆様方に心よりお見舞い申し上げます。さらにこのような厳しい状況の中で、苦難を乗り越えようとしている皆様方に心より敬意の気持ちをお伝え申し上げます。

今回の地震は、千年に一度の巨大な規模であり、強い震動と巨大津波、さらには原子力発電所の事故によって、日本はかつてないほどの苦難の時期を迎えています。この打撃から立ち直り、社会の復興に立ち向かうためには、私たち 1 人 1 人がそれぞれの立場で努力することが必要とされています。

地球を知り、そこに起こる現象を理解するための教育、勉学、研究を積み重ねていくことは、地震、火山噴火、台風等、様々な自然現象による災害を軽減し、あるいは未然に防ぐことになるでしょう。若い皆様方には、このような苦難な状況を乗り越え社会を復興させ、さらには今後の自然災害を軽減していくた

めにも、地球と地球現象に関する知識を身に付け理解するための基盤的な学問を、是非学び続けて頂きたいと思います。



全国から明日の日本を背負う若者が、地学オリンピックのために集まり、合宿と試験を通じて互いを刺激しあった。

.....
Chiorin! リレーエッセイ no.6

わが地学

勝谷 誠彦



私が地質学、なかでも鉱物にはまったのは 12 歳のころである。灘中学という進学校にまあまあの成績で合格したのに、いきなり地学部地質班の公開巡検というものにひっかかったために、その後の人生がかなり危ういものになった。全く勉強をせずに巡検ばかりやっていたのだ。卒業した時の成績は下からヒトケタであった。当時、灘校には地学の授業はなかった（書いていいのかな・笑）。しかし私は NHK の通信高校講座で地学を独学で学び、共通一次試験はそれで受けた。私がずっとやってきたのは鉱物の、それもペグマタイトに特化していたのだが、天文も気象もちゃあんと勉強した。地学というものは物理や化学に追い出された「その他の学問」を全部オモチャ箱

に入れたようなものだ、その時実感したものである。

天文や気象まで学んでやはりわかったのは地学は「フィールドワークの学問である」ということだ。新しい鉱物や星の発見者はアマチュアが多いし、気象の分野には気象予報士として多くの素人の方々が参入された。こんな学問はちょっとない。専門家と渡り合ってアマチュアが堂々とモノを言えるのである。

地学屋には「ヘンな人」が多い。しかし「教養人」も多い。これはコインの裏表だと私は感じている。多くの「フツウの人生を生きたい人々」がどこかで棄れているものに、地学に恋している人々は人生をかけているのだと思う。こんなロマンチックな学問はない。地学屋は「空

を見てるか」「地べたを見つめているか」だという。私は今でもそうだ。そうすると星や石のほかにも思わぬものが見つかることがあって、それで私は今も飯を食っているのである。

.....

かつやまさひこ。コラムニスト、写真家、コメンテーター。1960 年兵庫県尼崎市生まれ。早大卒。86 年文藝春秋に入社。96 年に退社後フリーランスとして、取材や執筆、テレビ・ラジオに出演。近著に、「美しき日本人は死なず」、「坂の上のバカ」など。

NPO 法人地学オリンピック日本委員会
ニューズレター Chiorin! (no.6)
平成 23 年 7 月 29 日発行
発行人: NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会
編集長: 萬年一剛 (広報副主査・神奈川県温泉地学研)
〒113-0032
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 4F
日本地球惑星科学連合事務局気付 (事務局長・瀧上)
印刷所: 懶あしがら印刷